

点から線から面へ

K.T

「大地」に参加した当時、孫娘は幼稚園年長から不登園、小学校も3日登校しただけで、1年間不登校が続き、見通しもない手詰まり状態でした。

不登園以来、園も学校も母親にそれなりの対応をしてきましたが、孫娘は関係者には頑として会わず、母親は外部からの働きかけが苦痛になり、私からの介入もされたくないという態度でした。

私はこのままではいけないと実情を訴えたり、相談のため最初は母親に内緒で園や学校にも行きましたが、親を飛び越えての対応はできないとのこと。子育て支援センター、複数の心療内科、大学の研究所、府の家庭支援センター等、関係機関に個別で相談。その間東京在住の父親には状況を報告、彼は月に一度は娘に会うために我が家に来ていました。家庭支援センターが父親に接触、やっと家族で相談出来るようになったのが一年半経過してからでした。その後は両親と孫娘に対して保健所で家庭支援センターの担当者との面談が月に一回程度あり、その経過で、心療内科での母子の診断を薦められ、病院へも数回通いましたが、孫娘は各種検査や面談は全面拒否し続けました。

そんな行き詰まった時期に「大地」に参加。目の前がぱっと開けた感じがしました。これまでは個別対応ばかりで、次の相談所を紹介され、一から経過や実情を何回訴えても先は見えませんでした。けれど、「大地」での経験交流やアドバイス等で、やっと不登校の状況や課題がわかり、子どものあるがままを受け入れ、見守り、居心地のいい環境を用意していけば希望がもてると励まされました。

自分が自分で良いと思える場所

幸山 由佳

息子が不登校だった小学4年生から中学3年生の間。

学校との連携はできており、小学生の間は息子の学習環境も友だちとの交流もまずまず。しかし中学生になると学習へ向かう意欲が低下。友だちも部活に打ち込み交流が減りました。同時に私も息子が不登校になった当初の頃のように不安を感じるが増えました。

息子のことを信じていても、不安の発作は潮の満ち引きのように押し寄せてくるものです。それからほどなくして立ち上がったのが大地。地域に不登校の子を持つ親の居場所はなかったので、互いの気持ちに真の意味で共感し、理解してもらえる場所が漸くできた！と思い、参加しました。

そこで自分の話を聴いてもらい、皆さんのお話を聴くにつれ、同じ事例はない、多様な人間を集団で育てる場所は、多様な価値観が必要なのでは、と感じるようになりました。大地は、場のリーダーもアドバイザーも参加者も同じ目線にいます。それは多様な気持ちを吐露するのにとても相応しいと感じます。

ご縁があり、息子もイベントに参加。子ども同士もつながり、その場で良い関係を作っているようです。子どもが成長しても、親子共にここにいつでも帰ってきて良いのだ、と思える場所です。



向日市物集女 りんごの花

不登校が私の人生の課題と 向き合うきっかけをくれた

H.N

漢方薬をこの夏からまた服用している。更年期のイライラ、気分の落ち込み、体調不良などが、少しでも緩和できればラッキーだ、というくらいのものであるが。とにかく私という人間は、精神状態の起伏が激しい。それが、長年の悩みであったし、周りの人達に及ぼす影響は、決して小さくないと思う。特に我が子には…。

大地の会に参加させてもらったのは、子どもが小5の秋に不登校になってから一年と少し経った頃だった。覚えているのは、「(自分の)母がしんどい」と号泣したこと。不登校の悩みを話す場で、まさか母親との関係の苦しさを訴えろとは、思いも寄らぬことだった。「誰だって母親とはいろいろあるって」「みんなそうやで」などの言葉は、これまでかけられたことはあるが、何も否定されずに、ただありのままの私の言葉を大地の人達に受け止めてもらえたという経験は、私の心に大きな衝撃を与えた。

これまでの私は、気に入らないことがあると物を投げつけ、手を上げてきた父親には無論のこと、そんな父を止めるでもなく淡々とやり過ごす母親にも、自分の気持ちなど話したことがなかったためか(今は母がそうするしかなかったのだろうと理解しているが)、会に参加した始めの数回は、「あんなことを言うべきではなかったな…」という思いが、後からわいてくることも度々あったのだが、自分の感情を素直に出せること、受け止めてもらえることがだんだん嬉しくなっていった。そして、参加者の方々と交流を重ねるうちに、共感しあう大切さや、人は人に癒されるのだということをしみじみ感じ入るようになった私は、「学校に行けない自分は、なんてダメな人間なのか」と苦しむ我が子にも、少しずつ向き合えるようになっていったのである。

子どもが小さい時から、“祖母”ではなく、“母親”として干渉してきた私の母(あるカウンセラーに、…あなたの子どもさんには2人の母親がいるんですねと言われたことがある)に、私は感謝しながらもどこか息苦しさを抱えて接していたのだが、「そんな生き方から脱却する」=「自分の人生の課題と向き合う」きっかけを与えてくれた我が子よ!——この記念誌をあなたが読むことは…あるかどうか分からないが、きっとあなたにも出会いがある。それが、自分にとって大切なものであるかどうか、その時には判然としないかもしれぬ。それとわかるのに長い時間を必要とするやもしれぬ。でも、でもあきらめないでほしい。私も一緒にドタバタしながら、見守っていくつもりだから。

乗り越えられない試練はない

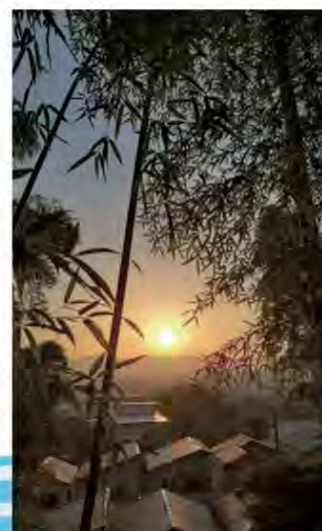
伊原 聡

私は不登校、引きこもりの経験者で、現在京都市内及びその周辺の親の会に支援者として参加させてもらっています。全然お役に立てていませんが、多くの方に受け入れてもらえていることが本当に有難く、感謝の思いでいっぱいです。

不登校、引きこもりは親のしつけや教育が間違っているからではなく、また本人の甘えやなまけから起こるものでもありません。誰でも体験する可能性があり、避けられないものです。

悪態や指図、暴言、暴力等様々な症状の対応がしんどくて、とても笑顔にはなれないと思いますが、これらの多くは決して本心ではなく、催眠術にかけられているような状態です。心も体も操られてコントロールできなくなっています。個人差はあるかもしれませんが、何とかしなければいけないという気持ちすら起こらず、ただ操られるままに行動するしかなかったというのが実感です。

ご両親が心配すればするほど、苦しめば苦しむほど事態は悪化するので、ご両親も居場所を見つけて、楽しみを見つけて、少しでも安心して暮らせるよう、また元気を取り戻せるようにしてほしいです。まずご両親の健康と命を大切にしてください。



竹林からの朝日

兄弟の不登校

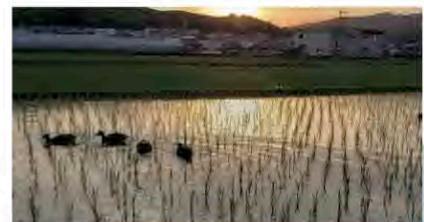
K.A

長男が行き渋りを始めたのは小5の秋。学校を休むことに強い罪悪感を抱いていた彼が、自宅で「もう自分はいなくなっていきたい…」と静かに涙を流して言った姿を思い出すと、今も胸が締め付けられる。当時次男は保育園の年長さん。春には小学校に入学したが、兄と一緒に通うことはなかった。

そんな二人に私はそれぞれこんな言葉をかけていた。兄には「学校休んでもいいよ、大丈夫やで」。弟には「頑張って学校行って偉いなあ」。二人が揃う場所では言いにくい。弟の学校での話は、自宅ではなく帰宅する前に外で出迎え、マンションの階段の踊り場に腰掛けて聞くようにしていた。

しかしそんな弟も小3の終わりに行き渋りを始める。兄弟二人とも不登校になるのか？と大きな不安を抱えている時、地元の親の会「大地」に出会った。

同じ思いを抱え、でも明るく前向きなお母さん達と仲良く活動させてもらい、支えられて私は今に至る。月日は流れ子どもたちは通信制高校3年と中学1年。相変わらず2人とも家で過ごすことが多い現在である。優しくユーモアのある魅力的な男子たちである。学校へ行けなくても子どもは成長し、自分独自の道を見つけて歩いていく。大地で私はそんな子ども達を目の当たりにさせてもらっている。我が子が不登校にならなければ今の私はない。自分も子も、あるがままでいい、ペースは人それぞれ、そう思える親に成長させてもらっている。



向日市物集女の田んぼ

道しるべの一つに

N.K

体調不良を理由に子どもが学校に行かなくなったのが2017年、小学校4年生の冬でした。明確な理由もわからず、学校に行かない、先生にも会わない子どもへの対応に行き詰っていた頃、9月に開催された高垣先生の講演会に参加し「大地」を知りました。

しばらくして定例会に参加し、年齢や性別は違えど「不登校の子を持つ親」という共通項で集まった人々が、自身や子どもの近況や悩みごとを吐き出し、参加者が傾聴・共感し、不登校の子についての話題を存分に話すのを目の当たりにしました。周りに話せず視野が狭くなり不安ばかりだったのが、急速に和らいでいった感覚を覚えています。

毎回緊張しますが、話すことで心のモヤモヤが少し和らぎ、同じ悩みを持って話される内容は子どものこれからを考えるのに非常にためになり、道しるべの一つにもなっています。

参加して3年半、多少の波あれど劇的な変化は見られない我が子ですが、子どもなりのペースで成長しているのを感じています。そう思えるのも大地に参加して気持ちに少しゆとりができたからかな、と。そんな気持ちをもたらせてくれたこの会に感謝しています。



桂川

一緒に揺れつつ
「元気な私」でいることを胸に刻んで

E.M

小5の夏休み、娘は外食に行く度に吐きました。初めは食べ過ぎ程度に思っていたのですが、続くにつれて「変だな」と思い始めました。今思えばその頃の娘はいつも苛立っていて、私や弟に当たり散らしていました。2学期に入り、朝に吐き気を催したり起きられなくなり、そして運動会を境に不登校に。小児科の発達外来を受診、起立性調節障害の検査を受けましたが違いました。生活リズムは崩さない方がいいと朝起こして一緒に朝食を食べ、私は仕事の昼休憩に娘の様子を見に帰っていました。娘はゲームをしたり、絵を描いたりお菓子を作ったりして過ごしていました。初めの頃は先生が様子を見に来てくれていましたが、娘が「連れて行こうとされるのが怖い」と言い、そのことを先生に伝え、その後は週1で夕方に来て、勉強を教えたりゲームをして帰るというふうになりました。私は学校に行かないことを理解しようとしながらも、『いつか行くかもしれない』という思いを持ちながら、せめて外出はして欲しいと好きな映画を見に行くなどはしました。

そうした中で『大地』に初めて参加。その場に座ただけで涙が出そうになり、自分が話す時にはボロボロ泣きました。周りに本当の意味で共感できる人や相談できる人がおらず、安心したのだと思います。それ以来、大地の保護者の方にたくさん助けられています。3学期、私塾をされている方と出会い、娘の居場所になればと思い行き始めたり、適応指導教室にも見学・体験を経て、今はコロナ不安で外出できませんが、行った日は楽しかったとほっこりできる場との出会いがありました。その娘は現在中2。中学に入学して、登校する日もありますが、今は自分のペースで過ごしています。娘はよく「ママは『行かない』と言ったら悲しそうな顔をする」と言われます。私にしてみれば、前日準備しているのに、心中『え〜』っと正直なります。今までのいくつかの体験(失敗)で学んだのは、親の気持ちを押しつけず、子どもが望んだことを実現する方が元気になるということ。ある日「どうして欲しい？」と聞くと、「愛して欲しい。それからママが元気でいて欲しい」と言われました。今も不安だらけで喧嘩もするし先も見えないけど、私は自分の仕事を続けながら、娘と一緒に揺れつつ少しでも居心地のいい毎日が過ごせたらと思っています。

暗闇の中に光が見えて

T.O

不登校、それは突然のことでした。

中学1年のお盆明け、部活の行き渋りから始まり、始業式の日、何度起こしても起きず、お腹が痛いと言いつつ、それが数日続き、2～3日に1回は登校できましたが、運動会の翌朝に行かないと言い切り、不登校生活が始まりました。

原因もわからず、ただただ日々だけが過ぎ10ヶ月ほどした頃、「大地」のフォーラムの案内を目にし、学校やスクールカウンセラーさんに聞いても出会えなかった、仲間のいる場所があることを知りました。

さっそく連絡し、定例会に参加しました。

今までの経緯や想いを聞いてもらって心が温くなり、息子にとって今は充電期間なんだと教えていただき、暗闇の中に少し光が見えた気がしました。

それからは毎月定例会で泣いたり笑ったりすることが気持ちのリセット・リフレッシュとなり、日々息子と向き合うことができました。本当にありがとうございました。

息子の充電期間も終わり、定例会に行くことも少なくなりましたが、いつまでも不登校に悩む親子の居場所として、活動し続けてください。



向日市ヲサン田 稲刈り後

子どものしていることで
無駄なことは何ひとつもない

F.M

「大地」が開催する、不登校フォーラム Vol.2 に参加して不登校の親の会が向日市にあるのを知りました。フォーラムでは不登校の体験者とその家族がスピーカーとしてお話をされていました。皆さんの話を聞き、同じように悩んでいる人がいる事をとても身近に感じて「大地」の定例会への参加を決めました。

その時、息子は中学2年生。中学1年生後半、体調不良の行き渋りから始まり不登校。2年生になり五月雨登校になりましたが、運動会後にまた不登校になりました。息子がこのまま学校に行かなくてもいいのだろうか？学校に行けるようになるにはどうすればいいのか？勉強を全くしないでゲームばかりで大丈夫なのか？昼夜逆転の生活で身体に良くないのではないのか？そして高校へ進学出来るのだろうか？いろいろな不安でいっぱいでした。その不安から子どもと衝突する事もありました。

定例会ではたくさん話を聞き、またたくさん話を聞いてもらいました。そして、ありのままの子どもを認める事の大切さや居場所の大切さを知りました。中学生で反抗期の子どもを親の力で動かそうと考える事が無駄なのだと思います。「大地」で「子どものしている事で無駄な事は、何ひとつもない。全てが未来へと繋がっている」この言葉を聞いて息子が自分の意志で動き出すのを待ってみよう考えるようになりました。

でも、いつ動き出すのかわからない期間を待つ事は思った以上に大変で、本当にこれでいいのか？不安になる時もありました。そんな時「大地」で話をして自分の気持ちを共感して認めてもらう事で不安は小さくなっていました。

中学3年生になった息子は、学校にはほとんど行きませんが修学旅行と卒業式は自分の意志で出席しました。そして通信制の高校を自分で選びました。今は、高校生になり週に2回ほど高校に通学しています。不登校という不安定な子どもの心を支えるには親の心が安定することも大切なのだと「大地」のみなさんに教えてもらいました。

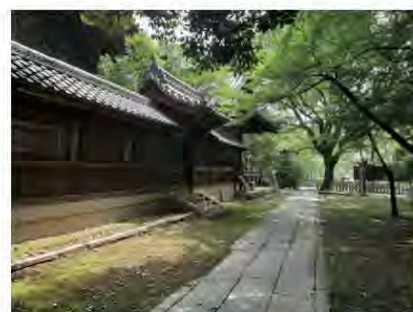
定例会で元気に

上野 志保子

共働きで忙しく過ごす娘夫婦に代わって孫の世話をすることが、私の役割になって17年がたちました。4人の孫のうち2人が不登校になりました。わたしなりの不登校への思いから、「[※]登校刺激はしない」「子どものあるがママを受け入れる」と心に決めて接してきましたが、具体的に細かいことになるとうしたらよいのか迷うことがありました。そんな時、「大地」の定例会でのお母さん方のお話を聞いて、腑に落ちることがたくさんあり、定例会の後にはもやもやした気持ちも晴れて、あくる日からまた孫と明るく接することができましたし、不登校をしても孫が確実に成長していることに確信が持てました。一方、娘夫婦は子どもたちと接する時間が短いせいか「いつまでたっても学校には行かない」「生活が昼夜逆転している」など、子どもの姿を否定的に見て心配することがよくありました。そんな時、定例会で話題になったことを紹介したり、お母さんたちが発行している「そのままでええねん」を読んでもらったりしました。今では、娘夫婦と私とで、落ち着いて孫たちを見守れるようになってきて、ほっとしています。

※ 登校刺激 …… 学校に行くよう促したり、登校させるさせるために学校に関わる話題を出すこと。「家庭訪問をする」「電話をかける」「プリントを渡す」など、児童生徒に学校を連想させるものも含まれる。

向日神社



自分の存在が認められるということ

上野 志保子

「手作り麺でラーメンを作りました。麺は頑張ってみんなでこねて作りました。スープは何時間もとりの骨をしっかりとこんで作りました。みんなおいしいと言って食べてくれました。」

これは、不登校中の孫Mが、ある新聞の読者欄に投稿して掲載された文です。Mは、不登校になってから、ほとんど家で過ごしていますが、週2回、来迎寺で開放してくださっている居場所には喜んで参加しています。そこで、家にいるときには手打ち麺を作ったりしていると話したところ、ご住職夫人が、Mがみんなに教えてあげて、みんなでラーメン作りをしてはどうかと提案してくださり、実現したのです。このことがうれしかったのでしょう。Mは自分の近況報告を新聞に投稿しました。学校に行っていないくても、人とつながって自分の存在が認められるという経験を経て、子どもは成長していくのでしょうか。中学時代は不登校をされていて今は大学生になった孫も、自分を認めてくれる居場所がありました。娘夫婦も、まだ学校には気持ちが向かないMの姿に、不安になりながらも、今のMの成長を喜んでいます。



向日市寺戸 来迎寺 地藏盆

頑張りすぎている
自分を癒してあげて

K.M

『大地』が立ち上がってすぐに私に声がかかりました。その頃すでに長男、長女の行き渋りからの不登校歴は長く、その後次男も続くんですが。子どもも私も同じ一年過ごすなら楽しく過ごさないかという考えに至っていました。私からは登校を求めず、担任とは連携を取りながら出来る限り手助けし（やりすぎた事もあったけど）登校は子ども自身に任せる事にしました。そうすることで一旦は落ち込む子どもでしたが、元気を取り戻すのが早かった様に思います。また同時に私も仕事や趣味を始めたり生活を楽しむようにしました。上2人では親子でかなり苦戦しましたが、次男の場合、「学校行きたくない」をすんなり認めてあげたことでホントに元気な不登校生活を送れています。現在も進行形です。親子で不登校生活を楽しみ、おしゃべりし、皆と同じでない道を選んだことで、将来的にも自身で考え行動し選択していくことを、今から学ぶ良い機会となっていると思います。

今このような私たち親子があるのはさまざまな出会いのおかげです。幼少の頃よりそのまんまを受け入れてくれた『親子リズム』からの『おまつりクラブ』『わんぱくクラブ』、その先の繋がり『森のアトリエ』からの『はれザウルス』、そして『大地』の仲間たちが私たち親子の大きな支えになっていることは間違いないです。

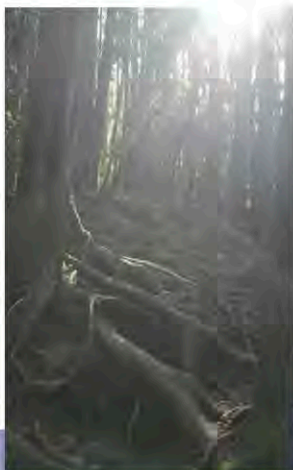
大地の定例会でかつての私のようにしんどい思いのお母さんが多くいると知り、過去の経験から母も子どももそのまんまを受け入れ、母は子から心も体も少し離れて、真面目で頑張りすぎの自身を癒してあげてほしいなと思いました。また【不登校新聞】に「お母さんも楽しんでと言われても楽しみ方がわからなかった」って見出しを見つけて、ならば、私の得意分野の楽しみをお裾分けしようとして勝手にですが、『大地』の（遊び担当）を引き受けました。お母さんたちはもちろん、子どもたちも巻きこんで、バーベキューや竹林から竹を切り出して流し素麺をしたり、仲間を集めてウクレレの会を作ったり、お寺の子どもたちと合同でピクニックに行ったり、できる範囲で沢山巻き込みながら楽しんでます。私自身も渦中ですが、しんどいお母さんたちの力になればなーって思っています。子どもたちは素直な天使。今の小・中学校に合わせる必要はないよね！

共感してもらうことはとても大事

I.M

大地には、娘の K が中 1 の時から参加するようになった。K が小 6 の秋から学校に行かなくなって、楽しいだろうと無理矢理旅行に連れて行ったり、勉強に取り組ませてみたりしたが、K に何の変化もなくただ空回りしているなと感じていた頃だった。しんどそうな娘に何もしてやれない、ただ身の回りの世話をし一緒に暮らしているだけ、生きているだけの毎日だった。そんな日々をなんとか過ごせてきたのは、大地で話ができたおかげだ。共感してもらうことはとても大事だった。

去年から、K は私と少しずつ外出をするようになった。ビデオを借りに行き、アニメのグッズを買いに行きたがるようになった。歯列矯正で歯医者にも通っており、中 3 になってからは、適応指導教室に週 1 回私と行っている。行けないこともよくあり、私もそんな時は休んだ方が良く思えるようになった。今も周りを見ると不安が押し寄せてくるので、先のことは考えすぎず、一日一日を家族で楽しく過ごしたいと思っている。



鞍馬寺 木の根道

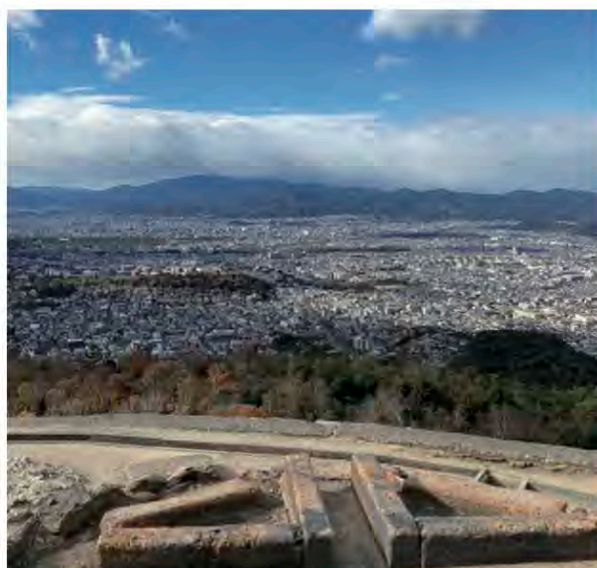
ある日過去の思いが消化

O.M

『大地』に参加してみなさんのお話を聞き、自分の思いを言葉にして話すうち少しずつ気持ちを整えることができるようになりました。そして同時に学びの場にもなり、様々な気づきがありました。また多方面の方々とつながりができ、子どもたちとイベントに参加しお手伝いさせていただく機会に恵まれました。このような仲間と過ごす時間は私にとって有意義なものとなっています。たくさんの方に支えられ今があることに感謝しています。

長い目でみた時にしんどい時期もあるけれど、一日一日を淡々と過ごしていくうちに進む方向がみえてくるように思います。自分の人生を引き受ける日々の中で、ある日過去の思いが消化されることがあり、あとは必要な変化が自然と起こってくるのであらうと感じます。

縁あって福祉に関わるようになりました。福祉とつながりをもてたことは心強くありがたく思います。今後私自身を大切に、心しなやかに自分のできることをゆっくりと進めていきたい。そしてこれからも小さな幸せを積み重ねていきたい。



大文字山からの京都市内

保護者にとって安心できる場

MORI

大地に参加のきっかけは公共の施設においてあった議会報告を読んだことがきっかけでした。もう私の子どもは義務教育を終えて、適応指導教室に行くことは無い年齢になっていましたが、その時感じていたことを伝えたいと思いました。息子が通っていたころは、週に数日で午前だけの開所だったと思います。

ここにいけば学校に行けるようになると思っていましたが、そんなに簡単なものではありませんでした。でも行き場のない、行き場が欲しいと思っているかもしれない子どもたちのために、常に行ける場所があればと願っていました。

あの頃、同級生のお母さんと話をしてもいつも疎外感を感じていました。学校の話には参加できません。だからその場が保護者にとってもいつでも相談できる、そして安心できる場のひとつであってほしいとも思っています。

子どもが学校に行けなかった時の気持ちをずっと抱えたまま過ごしていました。大地に出会い、あの頃の苦しい気持ちを話すことで気持ちを整理することができました。

自分の夢を叶えるため前を向いて少しずつ進んでいる息子信じ、見守っていかうと思います。



長岡京市今里のコスモス

すべてが私の学びで
自分を生きるための体験

Y.G

学校のシステムに合わず、行かないを選択して過ごしてきた毎日。どの場面でも多くの人が手を差し伸べてくれた。関わる仲間の中で育つ息子は、いろんな気づきを与えてくれました。息子が思春期に入ること、私が話を聴こうとしても聴いてあげていなかったことで揉めることもありました。そんな時、安心して過ごせる仲間や居場所があればと思っていたら、友人である代表と久しぶりの再会。高垣先生の講演会に誘ってもらい、子どもの今を受け止める、自分は自分であって大丈夫、というお話が心に響いたのが記憶に残っている。不登校で悩んでいる方々が安心して話せる場があるといいなあ、という思いから代表のお陰で大地は設立しました。定例会では、揺れつ戻りつ思春期の息子との関わりを大地の仲間や、アドバイザーが受け止めつつ、たくさんのヒントやアドバイス、情報を頂きました。また、大地での活動を仲間と共にする事で、子どもたちと関わり、たくさんの笑顔、喜びを体験しました。そして、子どもたちの居場所である来迎寺さんは、時々イベントに参加する息子を温かく迎えてくれる、また共に寄り添う母たちの居場所にもなり、私自身も元気をもらえる。全てが私の学びで自分を生きるための体験なんだと思う。

そんな中、私と息子はそれぞれの道を歩き出している。親子ですが時には友達のように、またきょうだいのように過ごしてきた彼が、ゆっくりと自立に向かって進む道を考える今、いつも大切に思いながら信じて見守りたい。そして、私自身をそのまんま受け入れて次に進みたい。手を差し伸べてくださった皆様にここでありがとうを伝えたい。



桂川